

支那淨土敎の時代區分とその地理的考察

道 端 良 秀

一

我々が普通歴史を眺める場合に於いて、最も必要なことは、その時代を考ふると云ふことである。従つて歴史研究の場合に於いては、先づ時代の區分と云ふことが大切であり、これによつて永き歴史を理解する一の方法となり得るものである。されば何れの歴史に於いても、各々の立場に立脚して、それが時代を區分し、以てそれが事實を明瞭たらしめんとして居る。そのことは佛敎史に於いても亦同様である。印度、支那、日本と各々の佛敎史に於ける各時代の區分法をなして、これを説明して居るが、併し乍ら吾が支那淨土敎の上に於いて、從來かゝる區分法によつて説明せるが如きことは、不幸にして未だ聞かざる所である。勿論これは無理をして、時代區分をして説明をなす必要を認めないが爲であらうけれども、苟くも、支那淨土敎史として研究さるゝ以上は、一般佛敎史と同様に、一應これが時代區分を判然として、研究さるゝが便利ではなからうか。かゝる意味に於い

て吾人は、今こゝに一私見を以てこれが區分法を提出し、以て大方諸賢の御叱正を仰ぎ度いと思ふ。

二

後漢の桓帝の時にあたつて、西域僧支婁迦讖の來りて、『無量清淨平等覺經』を譯出し、こゝに始めて淨土教經典の傳來を見るに至り、これより以後次第に淨土教の勃興を促すことゝなつた。爾來今日に至る迄、凡そ一千八百年の歲月を経て居るが、今この間に於ける支那淨土教の歴史を眺めて見るに、大體四期に分類出来るやうに思はれる。即ち、

第一期 準備時代

第二期 立教時代

第三期 融合時代

第四期 衰頹時代

の四期の時代である。勿論これは概括的な區分法であつて、更にこの中に細別せねばならぬであらうけれども、一應かく分類して見たのである。

第一期 準備時代

これは淨土經典の傳來より、隋末に至る凡そ前後四百五十有餘年間に名付けたるもので、この時代には、後漢、三國、兩晉、南北朝、隋の歷朝が包含されて居る。而してこの時代に於いては、淨

土教成立の基礎をなす、所謂淨土三部經其他が譯出されて居る。先づ『大無量壽經』に於いては、普通從來五存七缺と言はれて居る十二譯の如きは、その内十譯まで劉宋以前のものであり、後の二譯が次期の唐宋に譯出されて居る。^①又『觀無量壽經』に於いても、三譯あるの中、三譯とも劉宋以前のものであり、又『阿彌陀經』の三譯中、二譯は劉宋以前のものであり、一は唐代である。かく淨土の經典に已に南北朝以前に幾回も釋出されて居るが、又傍明淨土經典として、般舟三昧經、觀佛三昧經等々の經典も亦、主としてこの時代に譯出されたもので、次期立教時代への準備工作の第一は出來上つて居たのである。

さて一方北魏の時に當つて、菩提流支三藏によつて、天親の『淨土論』が譯出せられた。この『淨土論』の譯出こそ、支那淨土教に大なる影響を與へたもので、曇鸞大師はこの『論』に註解をなして、『淨土論註』二卷となし、遂に次期に於ける、道綽・善導の淨土教大成への確實なる基礎をなすに至つた。

又隋代に於ける天台の智者、淨影寺の慧遠、嘉祥寺の吉藏等の人々による淨土教の研究並びにその經典の註疏は、淨土教の發展に資するところ大なるものであつた。

然して、この準備時代に於いて、最も注意すべき事件がある。それは即ち廬山に於ける慧遠の念佛結社の白蓮社である。思を西方に寄せ、淨土に願生せんとするもの、一百二十有餘人の同志が、

慧遠を中心として、廬山の東林寺に集つたのであつた。この中には、實に當代に名かくれなき人々も多く集つて居た。東晉時代に於いて、已にかゝる念佛の結社が成立したと言ふことは、淨土教史上に於いてのみならず、支那佛教史の上に於いても、重大なる一事件と言はねばならぬ。従つてかゝる時代を淨土教の準備時代と名付くことは、相當論議さるべきことであらうが、併し乍ら、敢てこゝに準備時代と名付けたる所以のものは、次の如き理由からである。

一體廬山に於ける念佛の結社なるものは、その中心は全く慧遠一人であつた。慧遠の偉大なる徳望と、崇高敬虔なる人格とは、遂に百二十有餘人の同志の集合となり、結合となり、遂に白蓮社なるものが出来上つたのであつたが、これは全く特殊なものであり、一般化されて、即ち淨土教が大衆化された結果としての結合ではない、と云ふことを注意せねばならぬ。従つて、その中心たる慧遠の一度びこの世を去るや、その結社は忽ちにして、その跡を絶つてしまつたが如き、全く特殊なるものとしての證左であつて、淨土教が社會の宗教として流行したと認めることは出来ぬ。勿論この白蓮社の、後世に残せる影響の如何に大なるものなりしか、今更述べる迄もないことであるが、これによつて準備時代の名を覆すが如き理由とはならないであらう。

更に又慧遠の淨土教義そのものに就いて見ても、善導の易行易修たる稱名念佛への展開としてのものであるとも考へ得ることが出来よう。かく考ふれば、結社であらうと、教義であらうとも、何

れも次期立教時代への、一準備工作であつたと見ることが出来るであらう。

第二期 立教時代

唐代三百年に名付く。この時代に於いては、前代に於ける淨土經典の譯出完成と、諸師のこれが研究、並びに結社等の、準備工作によつて、淨土教は次第に一般化されんとしつゝあるの時、この時、道綽、善導の出現は、遂に淨土教をして、念佛一宗の獨立までに到達せしめたのであつた。道綽禪師の『安樂集』に於ける聖淨二門の判釋は、實に淨土教獨立への宣言であり、又善導大師の『四帖疏』は、古今階定の書として尊ばれ、以て淨土教獨立の完成を意味するものであつた。實に善導大師こそ、支那淨土教史の上に、千八百有餘年の永き歴史の上に於ける、千古不滅の明星である。こゝに於いてか、唐代善導の淨土教は、全く一の社會の宗教として、深く一般大衆へと浸潤して行つたのである。前代に於ける、單なる研究の對象たらしとする淨土教も、この時代に入つて、淨土教本來の面目に入り、宗教としての使命を全うしたものであつた。

かくして支那の淨土教は、道綽・善導によつて一宗の獨立をなしたもので、以後これが流をくめる懷感、法照、少康等の念佛弘法によつて、念佛の聲は巷に滿つるの盛觀を呈することゝなつた。實に唐代こそ、他の諸教と共に、淨土教の頂點に達せるものであつて、この點道綽・善導の二大高僧の功績を讀へると共に、上述の人々、更には何れも道綽・善導二大師の影響を蒙れる、迦才、慈愍、飛錫

等の、淨教弘宣に對する大なる功績も忘れてはならぬ。唐代の淨土教は實に、これら高僧の輩出によつて、益々隆盛となつたのであつた。

然し乍らかくの如き發展を遂げたる淨土教も、唐末に於ける彼の武宗の廢佛事件によつて、他の諸宗と共に大なる打撃を蒙り、又再び昔日の盛觀を見る能はざる状態となつて、この時代の幕を閉づるのである。

第三期 融合時代

この時代は五代及び宋代にして、凡そ三百有餘年間に名付く。この時代に於ける淨土教は、前代の淨土教を引繼げるものであつたが、到底善導當時の隆盛を見ることは出来ない。只その餘勢をかりて、この時代を通つたのであるが、然し乍ら又一面より考察すれば、特殊的なる淨土教として、隆盛を示したものと見る事が出来る。即ち前代に於けるが如き、善導大師の淨土教に於けるが如き、淨土教に對する絶對性とか、純粹性とかを失つて、そこに種々なるものを取入れた、不純なもの即ち諸宗と融合されたもの、念佛一法の純粹性を捨て、そこに禪を入れ、天台を入れ、戒律を入れるが如き状態となつたことである。かゝる諸宗との融合された淨土教が、これ以後の淨土教の特色である。

併し乍らこの傾向は、この時代に突然に現はれたものではなく、已に唐の中葉已後その萌芽を見

出すもので、この時代に入つて遂に淨土教は、全く各宗との混合的な、融合調和のものとなつた。

さてこの時代の淨土教を代表する人々を眺めて見ると、慈雲遵式、四明智禮、孤山智圓は何れも宋代に於ける天台宗の大家であり、永明智覺、慈覺大師宗頤、慈照子元は、これ禪家の俊傑であり、靈芝元照、戒度は律宗に屬する人である。かく考ふれば、その淨土教が如何なるものであるか想像することが出來よう。或は天台と淨土、或は禪と淨土、或は律と淨土と云ふやうに、各々混同されたものであり、雙修され、合行され、融合され、調和されたものであつて、念佛一法を以て淨土教を打立てるが如きことは、この時代には見ることは出來ない状態であつた。併し乍らかゝる傾向は、單に淨土教に於けるのみならず、宋代以後に於ける佛教は、皆悉く各宗の融合調和されたものであつたと云つてもよい。かく淨土教は、純粹性を失つたものとなつたとは云へ、この時代に於ける淨土教は、禪と共に大なる勢力を有し、一般社會の宗教として、信仰對象となつたものであつた。彼の東晋時代に於ける、慧遠の白蓮社の影響は、この時代に入つて、各處に念佛結社の運動を見ることとなり、僧俗の團體が等しく念佛によつて結合されて行くが如き、^④淨土教が宗教として深く民衆に歡迎されたことを物語つて居る一證左である。

第四期 衰頹時代

この時代は、元、明、清、及び現代迄、凡そ七百五十年間を名付けたるものである。宋代に於ける淨

土教の名残りも、元代に於ける國教たる喇嘛教に壓迫され、次第にその勢を失ひ、遂に今日に迄及んで居る。この時代に於ける、この淨土教の代表者として、元の普度、明の株宏、智旭、清の行策、彭際清、周夢顏などにして、これ又何れも前代の融合的な、合行思想に立てるものなることは云ふ迄もないが、他の一般佛教と共に、次第に衰滅へと辿りつゝ今日に迄及んだ。併し乍らこの衰滅に向へる佛教の中に於いても、最も勢力を有し、一般民衆に弘まつて居たものは、矢張念佛の教であつたことに注意せねばならぬ。

以上四期の分類を試み、以て淨土教史を概観したのであるが、これは全くの大別であつて、尙多くの論議すべき點多々あることであらう、譬へば、第一期及び第四期の如きは、これを更に二分すべきであらうけれども、今は以上の如く大別して以て諸賢の御示教を賜り度いと願ふ次第である。

三

さて次に淨土教の地理的分布を述べる順序であるが、これを述べる前に、上述の淨土教概観に關連して、淨土教の系統に就いて一言することゝする。

法然上人の『選擇集』上に、淨土教に於ける教系を擧げて、慧遠流と、道綽善導流と、慧日の慈愍流なりとして、三流あることを述べて居る。かゝることは周知の事實であるが、さて然らば、慧遠流の系統の人々は如何なる人々であるのか、慈愍流と云ふは、如何なる人々がこれに屬するのであ

るか、法然上人は、只道綽善導流の系統を述べて、他の教系に就いては何ら一言も述べてないが爲に、その系統が如何なるものであるか、これを知ることが出来ない。

さて今これら三流の特質を一言にて區別すれば、慧遠流の念佛は觀念であり、善導流の念佛は稱名であり、慈愍流の念佛は禪淨戒合行の念佛である。かく各々その流に於いて念佛の取扱ひ方に就いて異なるが故に、その系統も當然異つて來ねばならぬが、今慧遠流の系統を見るに、善導を以て慧遠流の第二祖となして居ることは、甚だ解し難きこと、言はねばならぬ。善導は明かに道綽に師事せるものであり、道綽又曇鸞によるもので、慧遠流とは全く別箇なる、曇鸞の系統に出づるものなることは、法然上人の『選擇集』の如くなることは、論ずる迄もないことである。然るに、宗曉の『樂邦文類』卷三、志磐の『佛祖統記』卷二七、及び大佑の『淨土指歸集』卷上等の書には、善導を以て慧遠流となし、蓮社に屬し、慧遠を第一祖、善導を第二祖とし、已下承遠、法照、少康、延壽、省常、宗願と次第して居る。これは一體如何に解すべきであらうか。善導流の念佛が、曇鸞系を引くと共に、一方慧遠の流を汲めるものであつたのであらうか。言ふ迄もなく善導の淨土教は、曇鸞、道綽の系統に屬するものであつて、慧遠流とはその流を異にして居るものである。然るにかく第二祖としたる所以のものは、そこに如何なる理由があつたのであらうか。何かの根據があつたのであらうか。思ふに、宋代に於いては已に述べたるが如く、善導教義の如き絶對的なものはなく、諸宗との融

合的なものであつたが爲に、淨土教の中に何らその異流を認めず、皆同様なるものとの考察のもとに、善導の念佛を以て、自力策勵のものであり、觀想の念佛と同様なりと見て、遂に善導をして蓮祖の第二に置いたものゝやうである。更にそれに加ふるに、唐の少康等の『淨土瑞應刪傳』には、善導が廬山を尋ねて慧遠の遺風を偲びたることの記述は、^⑤一層善導大師をして、蓮社第二祖となす有力なる證左となつたることであらう。

慈愍流に就いては、全くその系統を論じたるものなき爲、如何ともすることは出来ない。只鎮西系と思はるゝ人の作である。『淨土三國佛祖傳集』には、これが系統を述べて、元曉—迦才—慈愍—智圓—慈雲—了照と次第して居るが、この系譜の何等價值なく、一顧だに價しないものなることは、この書に述べたる荒唐無稽なる種々の歴史事實によつて知ることが出来る。^⑥されば慈愍流として如何なる人々を擧げるか、その推測を許すならば、彼の淨土教、即ち教禪一致、禪淨戒合行の思想を繼げる人、これらの人々を彼の流れと見ることが出来ると思へば、先づ唐代に於いては、法照禪師であり、宋代に於いては、智覺禪師、元照律師、或は明の株宏禪師、智旭禪師などはその代表的なものではあるまいか。勿論上述の如く、宋代以後に於ける淨土教は、融合的な、合行思想の上に建てられた念佛であるが故に、悉く慈愍流の系統に屬するものであると言ふことが出来る。

さて次に淨土教の地理的考察に入る順序となつたが、地理的考察とは、淨土教が地方的に眺めて、どの地方に盛んであり、どの地方に流行して居たか、又それが時代別に眺めて、何日の時代が、どの地方によく流行して居たか、その時代と地方との關係などを究明して見度いと思ふのである。

先づこれが研究方法として、淨土教關係の建築とか、造像とか、繪畫とか、或は各地方の民俗信仰等にも及ばねばならぬのであるが、今こゝに於いてはそれらに觸れずに、只淨土願生者に就いて、その地方の盛衰を眺めて見るこゝとする。併しこの淨土願生者と云つても、その程度を如何に定めるかに就いて、中々煩はしい故に、今は從來編纂されたる、支那の淨土往生傳に就いて、それに記載されたる人々によつて、それが地方的分布を眺めることに於いて、その地方の消長を推測するこゝとしよう。

然して、その往生傳として、こゝに取出すものは、往生傳として最も古い、唐の迦才の『淨土論』それに同じく唐の文諡少康輯の『往生西方淨土瑞應刪傳』一卷、北宋戒珠の『淨土往生傳』三卷、同じく王古の『新集往生傳』三卷、『新編古今往生淨土寶珠集』一卷、南宋志磐の『佛祖統記』卷二六、二七、二八、二九、清の彭希涑の『淨土聖賢錄』九卷の七編とする。勿論この外にも、王日休の『淨土文』、宗曉の『樂邦文類』、普度の『蓮宗寶鑑』大佑の『淨土指歸集』、株宏の『諸上善人詠』、道衍の『往生集』、周克復の『淨土晨鐘』其他の往生傳があるが、これらは何れも上に擧げたる七種の中に攝められて居

るからして、今はその代表的なものとして、以上七編によつて調査することとする。

先づ説明の煩雜を避ける爲に、以上七部の往生傳に記述されたる往生人に就いて、その人との活動地（不明なる時は出世地）を、現代の省別に分類して見ると次の如くである。

省名	總數	書名	淨土論	瑞應傳	三往生傳	佛祖統記	聖賢錄
山東省	〇	〇	一	〇	〇	〇	一
直隸省	〇	〇	一	〇	〇	〇	五
四川省	〇	〇	一	〇	〇	〇	九
湖北省	〇	〇	一	〇	〇	〇	六
湖南省	〇	〇	一	〇	〇	〇	九
安徽省	〇	〇	一	〇	〇	〇	九
河南省	〇	〇	一	〇	〇	〇	一
江西省	〇	〇	一	〇	〇	〇	三
江蘇省	〇	〇	一	〇	〇	〇	七
浙江省	〇	〇	一	〇	〇	〇	二
陝西省	〇	〇	一	〇	〇	〇	二
山西省	〇	〇	一	〇	〇	〇	七

雲南	福建	外省	不明
○	○	○	一
○	○	○	三
○	○	一	四
○	一	○	一五
一	一	○	三八

表中『三往生傳』とあるは、戒珠の『淨土往生傳』、王古の『新集往生傳』、『新編古今往生淨土寶珠集』の三編にして、今只便宜の爲に、三編の往生人を重複を避けて纏めて、一つとなし表に現はしたのである。^⑦

以上の表によつて各省に於ける往生人の多少を知ることが出来るが、今先づ迦才の『淨土論』に記載されたる往生人は總數二十一名であつて、それを省別に分けて見ると、山西省が十二人、陝西省が二人、浙江、江蘇、河南、安徽、四川、直隸が各々一名、何處を調査しても不明なるもの一名と云ふ割合である。已下の諸傳悉くこれに准ずる。

さて今この表を眺めて感ずることは、山西、陝西、浙江、江蘇、江西の五省が、最も多數を占めて居ることである。更にこの中に於いて、江西省は、廬山の白蓮社に於ける、東林の十八賢を悉くこの省の内に入れたるが爲に、割合に數を占めて居るが、若し東晉時代のこの十八人を除く時は殆んど皆無となつて他省と同様であるが故に、事實往生人の各時代に通じて多いのは、北方に於いて

は、山西省、陝西省の二省であり、南方に於いては、浙江省、江蘇省の二省であることに注意せねばならぬ。

次に今この四省に就いて、各往生傳に於ける往生人の比率を考へて見るに、『淨土論』に於いては、北方の二省は、全體二十二名中、十四名の約七〇%を占めて居り、南方二省の二名に對して七倍である。次の『瑞應傳』に於いても、北方の二省は總計四十八名中、二十六名の約五五%を占め、南方二省の六名に對して約四倍半であり、又次の三往生傳を見ても、北方の二省は總計百名に對して、三十四名の三四%に及び、南方二省の二十名よりは、凡そ二倍程の數を占めて居る。然るに『佛祖統記』、『淨土聖賢錄』に至つては、俄然南方の二省が優勢を示し、北方の二省を遙かに凌いで居る。即ち『佛祖統記』に於いては、南方の二省を見るに、總數二百六十二名中、百五十三名と云ふ全體の約六〇%を占め、北方の二省四十名に對して約四倍と云ふ、前傳記と逆なる狀態を示して居る。次の『淨土聖賢錄』に於いても、總數四百七十六名に對して、南方の二省は二百九十二名の六〇%強を占め、北方の二省の五十三名に對して五倍の數を示して居る。一體これは何を物語るものであらうか。

以上七種の往生傳の中、前五種迄は北方の二省が優勢を示し、後二種は反對に南方の二省が優勢を示して居るのであるが、前五種は唐及び北宋の編述であり、後二種はそれ以後のものであること

より考へて、かくの如きことを知ることが出来る、即ち唐代を中心としたる淨土教は、北方の二省がその中心地であり、唐已後の淨土教は、南方の二省を中心地としたものであると云ふことを。更に一層このことを了解し易からしめんが爲に、上表の中から『佛祖統記』と『聖賢錄』を取出して、四省に於ける往生人の時代の細別表を示さう。

佛 祖 統 記				淨 土 聖 賢 錄			
山 西 省	陝 西 省	浙 江 省	江 蘇 省	山 西 省	陝 西 省	浙 江 省	江 蘇 省
總 數				總 數			
二〇	二〇	二九	二四	二七	二六	二六	七六
唐 以 前		宋 以 後		唐 以 前		宋 以 後	
僧 尼	在 俗	僧 尼	在 俗	僧 尼	在 俗	僧 尼	在 俗
一一	一〇	〇	一	一八	三	二	二九
二	七	〇	二	一	三	一	三八

先づこの一覽表に於いて、五代を一線として上下に二分して、唐及びそれ以前と宋及びそれ以後

となして、その時代に於ける往生人を僧俗に分類して見たのである。『佛祖統記』に就いて見るに、北方の山西省には二十名の往生人が居るが、それを時代に分類すると、唐以前は僧尼が十二名、在俗が二名、計て十四名に對して、宋以後は僧尼は一名もなく、在俗が六名と云ふ状態で、その比は二對一である。然るに南方の浙江省を見るに、總計百二十九名の中に於いて、唐以前には僧尼六名在俗無しに對して、宋以後になると、僧尼は六十一名となり、在俗は六十二名となつて、總計百二十三名を示し、唐代已前の僅か六名に對して、二十倍に達して居る。このことは表に現はれて居るが如く、『淨土聖賢錄』に於いても同様である。

この事實によつて知り得ることは唐代以前に於いては、北方の山西、陝西を中心とせる淨土教が、宋以後に於いては南方の浙江、江蘇にその中心が移つたと云ふ、動かし難き證左となるものである。尙前表によつて見るが如く、江西省の多數によつて知るが如く、先づ支那の淨土教は、東晉時代に於いては、江西省に於ける廬山を中心として榮えたが、間もなくそれは北方の山西、陝西に移動して、こゝに淨土教の實を結び、唐代淨土教としてその頂點にあつたが、宋代以後は再び淨土教は南方へと下つた。併しこの時は江西省の廬山に非ずして、浙江、江蘇の地方に榮えることゝなつた。

さてかくの如くその中心地が、北方より南方へと移動して行つたと云ふことは、如何なる原因があるのであらうか。思ふにこれには色々と理由もあることであらうけれども、其の主なる原因は、

文化の中心地たる一國の主都の移動によるものであらう。淨土教の極盛たる唐代は、その主都は陝西省の長安であつたが、宋は後に北方朔北民族たる遼、金、のために追はれて南方に下り、浙江省の杭州を國都と定め、明朝又都を江蘇州の江寧(南京)に定めた。かるが故に各文化の中心はかゝる主都を中心として行はれたものであり、従つて淨土教も亦この地方によつて流行したることは、當然と云はねばならぬ、唐以後長安の都は、殆んど文化の圏外に置かれたかの如く、北方に於ける國都は、遼、金、元に於いては、汴京(河南省開封)、順天府(北平)、其他蒙古の地に轉々したるが爲、到底南方の杭州、江寧等に及ぶべくもなかつた。かくして淨土教は北方より南方へと文化の中心地に從つて移動したものであつた。

かく淨土教もその國都を中心として榮えたやうであるが、然らば、北方淨土教に於いて、長安を中心とせる陝西省が多數の往生人を出して居ると云ふことは何人も肯定する所であるが、この陝西省と同様、否な表によつて見れば、數字的には陝西省を凌いで居る山西省の淨土教を如何に解するか。第一表によつて知る如く、『淨土論』、『瑞應傳』に於いては殆んど山西省が占めて居る。而してこの山西省に於ける中心地は、并州(晉陽、太原)である。遙か北方の邊疆たるこの一并州の地が、如何なる理由によつて、淨土教の中心地となつて居るのであらうか、然かも唐代淨土教の黃金時代に於ける中心をなすものであつて見れば、そは又、支那淨土教全體に於ける、一中心をなして居る

ものと言つてよいであらう。

然らば、この一片地の如く見ゆる并州の地が、何故にかくの如く淨土教の中心地となつたか。少しく考察の眼を向けることゝしよう。

五

さて普通并州と言つた時は、今の山西省大原府に相當するのであるが、今唐以前に於ける并州の地を考察するに、幾度かの變遷を見て居り、更に并州全體を言ふ場合と、その并州の州治、即ち晋陽或は大原を指す場合があることを考へねばならぬ。

先づその并州の沿革を見るに、大體今の山西省を并州と名付けられたるもので、『山西通志』二三卷によれば、古代の虞、商、周に於いてこの地方を并州と名付け、漢に至つては天下を十三州に分ち、以てこの地方を并州と名付け、更に三國に於ける魏、及び次の晋もこれを受け、五胡十六國時代に於いて、前趙、後趙、前燕、後燕、前秦等の如き諸國も同じく并州と名付けて居る。これら何れも政治的地域の分割であつて、この時に於ける州治は晋陽と呼ばれ、或は大原と呼ばれて居るが、又并州とも呼ばれて居た。

北魏に於いては并州は山西省の一部に屬して居るもので、『魏書』卷一〇六地形志によれば、并州の下に大原郡(十縣)、上黨郡(五縣)、卿郡(四縣)、樂平郡(三縣)、襄垣郡の五郡二十六縣を統割し、

州治は太原に在つた。次の東魏、北齊、北周も同じくこれを踏襲したやうである。隋はこれを改めてこゝを冀州とし、その下に大原郡等を置いたが、唐に至つて山西省の地は、天下十道に分つた中の河東道に屬し、北魏、隋などに於ける大原郡を并州となし、又は大原府と稱した。或は又その大原府城を北都とも北京とも稱せられた。

これによつて并州と言つても、廣義に於ける場合と、更に狭き地域と、更に又その州治の城を指す場合と、時代によつて異なることに注意せねばならぬ。『通典』卷一七九、『文献通考』卷三二六を見れば古之并州、蓋舜分冀州爲之置十二牧則其一也。以其地在兩谷之間地故爲并州。〔乃至〕今之

并州爲大原府古唐國也。〔下略〕

とあるによつて、その地が二つの谷の間に在るを以て并州と名付くと云ひ、時代に於いて地に廣狹あることを示して居る。

唐に於いてこの并州が大原府と改められたのは、開元十一年（七二三）のことである。併し後に於いても色々と改められたが、唐に於いては并州と大原府とは同一のもので、前代の大原郡に相當するもので、并州の地域としては餘程狭くなつて居る譯である。而してこの并州即ち大原府には太原、晉陽、文水、陽曲、樂平、大谷、清源、祁、榆次、孟、壽陽、廣陽、交城の十三縣があり、この州治は大原即ち古の晉陽であつた。これを并州とも普通呼ばれた。尙この大原城は、唐に於いては、

帝都長安及び洛陽と共に、天下三京と稱せられ、長安を西京、洛陽を東京と云ふに對して、大原は北京と稱せられた。或は又北都とも呼ばれた。『新唐書』卷三九地理志に

北都、天授元年置、神龍元年罷、開元十一年復置、天寶元年曰北京、上元二年罷、肅宗元年復爲北都^一。

と云ひ或は『舊唐書』卷二九地理志によれば、「北京大原府」と記して居る。又天寶には十三縣であるが、それ迄は十四縣に分れて居た。かくの如く大原の地は北京と名付けられ、北都と呼ばれ或は又并州大原などと時々變化して居るけれども、この地が唐代發祥の地として、如何に重要視されたか、從つて文化の程度如何なりしや、これによつて略々知ることが出來よう。

山西の地は古くより發展して居たものであることは、傳説を出でされども、堯の都は平陽にして、今の山西省の臨汾縣であり、舜の都蒲坂は今の山西省永濟縣であり、夏の都安邑は今の山西省安邑縣である。併し乍ら最も文化の發展を盛ならしめたるものは、南北朝に入つてからである。北魏に於ける山西省の大同の主都は、西域文化の輸入地であり、更に洛陽に都を遷してよりは、總ての文化は平城即ち大同より大原を通つて洛陽に入つた。この大原の位置は實に兩都の交通の要路に位し、あらゆる文化の仲介者となつた。從つて一僻地の如く見ゆるこの大原の都城が、當時の主都と何ら變りなき諸文化を有して居たことに注意せねばならぬ。特に北齊はこの大原の地は發祥地とし

て、後鄴に都を遷したが、この地を別都或は舊都と稱し、新都鄴と何ら異なるなき待遇を受けて居たものであつた。

北朝に於ける文化の中心地は、帝都たりし北邊の恒安即ち大同と、長安、洛陽、更に鄴と大原とを擧げることが出来る。南北朝時代に於ける佛教の興隆、特に北朝に於けるその發展は實に燎原の火の如き有様であつた。支那記錄の數字に於いてこれを實證することは正確ではないが、北魏北齊時代に於いて、寺は四萬、僧尼の數三百萬から四百萬と云ふに至つては、^⑤實に支那佛教史上最頂點に達するものと言はねばならぬ。勿論この數字が何處まで信すべきか、又伽藍僧尼のみを以て佛教の隆盛を證明することは出来ないにしても、この時代に於ける佛教が何れも旭日昇天の勢を以て、隋唐時代の佛教完成への準備としての活動目覺しきものありしことを忘れてはならぬ。

世界に誇る佛教藝術の精華たる、彼の大同の石佛、及び龍門、天龍山の石佛は、實にこの時代に企てられたことに注意せねばならぬ。其の規模實に雄大にして、大同に於ける雲崗の石窟の如きは實に蜿蜒三十支里に及び、五大佛像の如きは何れも六十尺から七十尺に及んだ。^⑥この驚くべき佛教文化の遺蹟は、今日尙吾等の前に展べられて居るが、風雨その他によつて次第に破壊され、余等のこの地を踏査せる昭和二年に於いてすら、見るに忍びざる慘害を蒙つて、何らの保存も加へられて居なかつたが、その後年々破壊され、今日に於いては、余等の調査せし當時の現状すら見ることの

出來ぬ状態と聞く。悲しむべきこと、言はねばならぬ。誰もが考へること乍ら、何とか方法を講せねばならぬことであらう。

論述が思はぬ方向に轉じたが、北魏に於けるこの大石窟は、文成帝の洛陽遷都と共に、洛陽の近く龍門山に再び大石窟を創め、大同のそれと共に永く後世に、その佛教文化の精粹を止めたのであつた。この大同と洛陽の中間に位して、この文化の仲介をなしたるものが大原であつた。大原の西南三十里、天龍山に於ける石室二十四龕、石佛四尊の創められたるは、北齊の時である。北齊の佛教文化は、北魏及び東魏の佛教文化の延長であり、且大成でもあつた。北齊の都たる鄴を中心としたる佛教は、前代の菩提流支の流を汲める道寵の地論と、勒那摩提によれる慧光の地論とは、何れもこの鄴都にあつて互に威を振ひ、更にそれが門下より道憑、法上、僧範、曇遵、慧順等限りなき俊才競ひ出でて、北齊鄴都の佛教は、南方梁陳の佛教と對峙して、建康對鄴の佛教が即ち南北佛教を代表して居たやうである。

この鄴都に對して大原はその別都として、發祥の地として、同様の状態に置かれて居たものであつて、天龍山石佛の如き實に大同、龍門のそれに倣つたものであらう。『山西通志』卷五十七古蹟考によつて見れば、法華寺、崇福寺、童子寺、天龍寺、懸甕寺、仙巖寺、上生寺等、大原附近の寺院は多くこの時代に建てられて居ることを見れば、大原に於ける佛教が如何なる状態なりしか、略々

了解することが出来るであらう。

唐代に於ける并州の地は、唐室發祥の地として、長安、洛陽と共に唐代三京の一に數へられ、その都城を北都、北京と稱せられたことは上述の如くである。しかも北朝の佛教文化をそのまゝこの地方に受繼いで居る。天龍山の石佛は、北齊の時より唐代に至つても續けられて居る。寺院も建立され、又修復されて居る唐中期頃より五台山の佛教盛んとなり、文殊信仰の隆盛を來し、五台山巡禮の流行は、遠く我國に迄及び、入唐僧圓仁を初め其他の人々が何れも五台山に參拜して居る。この唐代に於ける五台山巡禮は實に、當時の一般民衆に取つては、宛も基督教徒のエルサレムの如く、或は又今日我國の四國巡禮か、或は又高野山の如き位置にありしものゝやうである。圓仁の『入唐求法巡禮行記』卷二によれば、當時巡禮の盛なる状態、これら巡禮者の爲に、巡禮路に半日行程位に、普通院と稱せらるゝ宿舍が設けられて、これらの人々の利便を計つて居る事が述べられて居る。而してこの并州の大原は、實にこの五台山巡禮の要路を占めて居るもので、唐代帝都の長安、或は洛陽との間にあつて、五台山佛教文化と帝都との仲介をなすものであつた。圓仁も亦この地を経て五台山より長安に至つたものであるが、今彼の『巡禮記』によれば、卷三に、

七月一日(開成五年)……從五台往長安、向西南行、二千餘里、得到長安也。

とて、七月一日に五台山の中心たる大花嚴寺を出でて、金閣寺、清涼寺、靈境寺、佛光寺等を巡禮

して、愈々山を下り、それより普通院に泊り、十三日に大原府に到着した。

十三日 平明發、行十五里到大原府、屬河東道、此則北京、去西京二千來里。

と云ひ、圓仁はこゝに留ること十四日間、この間、四衆寺、崇福寺、開元寺、大業寺等の諸寺の齋を受け、又十五日より十七日に行はれたる諸寺の孟蘭盆會に望み、或は巡禮者の人々と話を換し、或は又「五台山化現圖」を受けるなど、この北京の地に多くの時日を費して居る。而して二十三日に大原を立つた圓仁は汾水に沿つて道を取り、汾州、晋州を経て長安に入つたのは八月二十二日であつた。この道が即ち長安と五台山とを結ぶ、巡禮者の路であり、佛教文化の交通路であつた。當時長安と五台山とが如何に往來頻繁なりしか、五台山が如何に朝廷の尊信を受けて居たか。朝廷より年々布施さるゝ財物が如何に莫大なものであり五台山諸寺の結構が如何に豪壯華麗を極めて居たかを考ふれば、略々想像することが出來よう。^⑩

尙又大原附近の石佛は、天龍山のみならず、『法苑珠林』卷十四によれば、并州の西山の童子寺、及び開化寺には各々二百尺餘の大像が刻まれて居り、高宗は皇后と共に親しくこゝに御幸され、禮拜恭敬し以て多くの珍寶を布施され、内宮百官も亦これに倣ふところあつたことを述べて居る。更に吾々の最も注意を牽くことは、大原の西南約九十支里にある石壁山玄忠寺である。淨土教の曇鸞、道綽の居住地として有名であるが、今こゝに在る『甘露義壇碑』によれば、この玄忠寺に甘露壇なる

戒壇が設けられて居たもので、當時西都長安の淨業寺の靈感壇、東都洛陽の會善寺の會善壇と共に、北都玄忠寺の甘露壇として、天下三戒壇の名を擅にして居たものであつた。唐代佛教界に於ける并州の地が、如何なる重要な地位にありしものなるか、以上の叙述に於いて充分これを知ることが出来るであらう。

六

以上に於いて并州の地が決して一僻間の地に非ずして、一文化の中心地であり、佛教の隆盛地であつたことを知ることが出来たが故に、更に進んで、何が故に前述の如く、并州の地が淨土教の中心をなして居たかに考察の眼を轉ずることゝしよう。

論ずる迄もなく支那淨土教の大成は、善導であるが、その善導は道綽の弟子であり、道綽は曇鸞によつたものである。従つて支那淨土教は實にこの三人によつて出来上つたと云つても過言ではなからう。然るにこの三人は何れもこの山西の地、并州に在つたもので、曇鸞は晩年石壁山玄忠寺に居住し、道綽又一生が間この寺を中心として淨土の教を弘め、善導又こゝに來つて道綽に師の禮を取つて、こゝに淨土教が大成されたのである。然ればこの并州の地こそ、支那淨土教の根源地と言はねばならぬ。玄忠寺こそ唐代淨土教の總本山とも稱せらるべきである。この玄忠寺を中心として淨土の教は四方へと及されたものである。迦才の『淨土論』卷下の道綽傳には、并州の晋陽、太原、

汝水三縣の道俗七才以上は、悉く念佛を稱へしめ、小豆を以てこれを數へ、上精進なる者は九十石に及び下精進者にしても二十石を數へたと述べて居るを見れば、この地方の念佛の盛なりし状態を知ることが出来る。

この山西省の地、即ち并州、汾州、汾西の諸州を中心としての念佛の教は、先づ曇鸞によつて植付けられた。魏帝より、神鸞として尊敬され梁の天子より曇鸞菩薩と禮された。曇鸞の教が如何に民衆に感應したか。玄忠寺がその晩年の處であつたが、この并州の玄忠寺こそ實に念佛教の源泉であつた。道綽のこの寺に於いての活動は上に述べたるが如く、更に『金石華編』卷八四の「石壁寺鐵彌勒像頌」によれば、貞觀の初に當つて、太宗皇帝は、皇后の不豫に會して、親しく道綽のこの石壁玄忠寺の道場に參詣して禮謁し、大いに供養啓願して居る。この一事は、この玄忠寺が如何なる位置にありしものか、道綽の教が如何に社會に影響を與へて居たかの、大なる一證明であらう。

尙この石壁山玄忠寺に就いて、并州と云ひ、或は汾州と云ひ、或は又西河とも云ひ、その位置に就いて色々と論ずることもあるが、詳細は稿を改めて論ずることとして、こゝでは、汾州の石壁玄忠寺であり、并州の玄忠寺であり、西河の玄忠寺である。西河と云ふを道綽の代名とするはこれによるものであると云ふに止めて置く。

それは何れともあれ、この玄忠寺に於ける、曇鸞、道綽、更には善導によつて起されたる念佛の

嵐はこゝを中心として山西全體を包み、更には陝西省長安の帝都へと進んで行つた。道綽禪師の生涯の布教は、よくこの地方の七才以上の人々をして八十石、九十石の念佛を稱へしむるに至り、更に善導、道撫、僧衍、其他多くの弟子を得て、念佛を弘通せしめたが、彼の弟子に就いて、近時發見されたる金澤文庫所藏の『漢家類聚往生傳』によれば、新に道闇、道穂、道障、善豐の四人の比丘が道綽の弟子として判明するに至つた。^⑫ 道綽のこの地に殘せる念佛の足跡は實に偉大なものと言はねばならぬ。

又、五會念佛を以て淨土教を弘めたる彼の法照は、五台山竹林寺に在ると共に、或は長安に出で或は又この大原に滞り、五台と長安とを往復繁く淨教を宣傳した。彼が著五會念佛誦經觀行儀三卷は、實にこの大原の龍興寺に於いて成つたものであつて見れば、彼がこの并州の地に在つて淨土教を布教せること明かである。又圓仁の『巡禮記』卷三によれば、前に一寸述べた『法苑珠林』卷十四に記せられたる童子寺の大石像は、阿彌陀佛の像であることを知つた。唐代に於ける石佛が、斷然他佛を壓して彌陀像となつたことも注意すべきことである。^⑬ 金の非濁の『三寶感應要略錄』中の第四十七「并州道俊寫大般若經感應」の物語は、『并州往生記』より出せるものとあるより見れば、并州地方だけの往生人に關する傳記が編纂されて居たことを知り、これによつて、この地方の淨土教が如何に盛んに行はれて居たものか、これによつて充分知ることが出来る。

以上の敘述に於いて、一邊疆の地たるが如き并州の地に、先に掲げたる一覽表に現はれたるが如き、往生人の數が如何なる理由によつてかくの如く多いかの、最初に提出せる疑問は氷解されたことであらうと思ふ。要するに、并州こそ南北朝に於けるより一文化の中心地に當り、佛教文化の隆盛を來せるものであり、曇鸞、道綽、善導の淨土教の大立物の居住し給ふところであるが故に、この地こそ支那淨土教の根源地とも稱すべく、唐代に於ける中心地をなして居たものであつたと云ふことに注意せねばならぬ。長安の淨土教は、善導がこの并州の淨土教を齎したものである。かくして以後善導の長安を中心とせる念佛の教は、その念佛の聲城内に滿つとも云はれ、一方善導の淨土變相の繪畫と共に、一層深く社會大衆の宗教として、迎へらるゝことゝなつた。それに續いて懷感、懷暉の二俊その門より出づるあり、或は慈愍あり、飛錫あり、法照あり、少康あり、何れも主都長安を中心として、淨土教を弘めたるが爲に、長安を中心とせる陝西省の淨土教は并州を中心とせる山西省の淨土教と共に、唐代淨土教の二大中心地をなすに至つた。

七

以上數項に互つて、支那淨土教に於ける時代區分と、其の系統、並びにそれが地理的分布に就いて考察したのであるが、今こゝに於いて、それが結論として、以上の三者を通じて、各々に配當してこれを纏めると次の如くである。

第一期は佛教傳來より隋に至る間であつて、主として江西省の廬山を根據とせる。慧遠流の念佛であつた。東晋の廬山に於ける慧遠の白蓮社は、實に支那淨土教の魁にして、後世支那淨土教に影響を及ぼせること頗る大であつた。後世宋代以後に於ける念佛結社の勃興は、實にこの白蓮社に範を取れるものであつた。然し乍らこの淨土教發祥地たる廬山も、慧遠没後は殆んどその跡を絶つたが如く、その中心は北方に、或は江蘇、浙江へと移り、廬山は只念佛白蓮社の舊地として、永く念佛者の渴仰するところとなつた。

而して前にも一言せる如く、この永き期間を準備時代とし、それに廬山の慧遠流を配當すること、大いに議論のあるところで、これは細別して南北朝以前を前期、以後を後期とすべきであり、前期は廬山中心の慧遠流であるが、後期に於いては已に并州に曇鸞ありて、善導流の淨土教の準備をなして居るものであり、淨影寺の慧遠、嘉祥寺の吉藏等又北方に在つて淨土教を究めて居るところよりして、淨土教は已に南方より北方に移動したやうである。さればこの準備時代を以て慧遠流のみに代表させることは不當であるけれども、今は大別して一應かく配當せるに過ぎない。

第二期は唐代三百年にして、山西省の并州、及び陝西省の長安を中心とせる、道綽善導流の念佛であつたことは上述の如くである。

第三期は宋代にして融合時代、第四期の元以後今日に至る頽廢時代は、何れも江蘇省の江寧、浙

江省の錢塘（杭州）を根據とせる、慈愍流の念佛であつた。慈愍は第二期唐代の人ではあるが、その流は宋以後の淨土教の祖をなすものと言はねばならぬ。諸宗融合の淨土教は實にこの慈愍より出づるものと言ふべきである。されば三流の配當をすれば、慈愍流はこの第三期、第四期に相當するところとなる。かくして支那の淨土教は、以上の變遷を経て今日に至つたものと言はねばならぬ。

① 五存七缺とは

① 無量壽經二卷	後漢	安世高譯	缺
② 無量清淨平等覺經二卷	後漢	支婁迦讖譯	存
③ 大阿彌陀經二卷	吳	支謙譯	存
④ 無量壽經二卷	曹魏	康僧鎰譯	存
⑤ 無量清淨平等覺經二卷	同	白延譯	缺
⑥ 無量壽經二卷	西晉	竺法護譯	缺
⑦ 無量壽至真等正覺經二卷	東晉	竺法力譯	缺
⑧ 新無量壽經二卷	同	覺賢譯	缺
⑨ 新無量壽經二卷	宋	寶雲譯	缺
⑩ 新無量壽經二卷	宋	曇摩密多譯	缺
⑪ 無量壽如來會二卷	唐	菩提流志譯	存
⑫ 大無量壽莊嚴經三卷	宋	法賢譯	存

以上無量壽經は諸經錄によつて、五存七缺と十二譯ありしことを述べて居るが、これに就いて境野博士は『支那佛教史の研究』

の中にこれを論じて、十二譯は經錄の誤であつて、元來五譯されたものであり、それがそのまゝ、五譯とも存して居るとの説を立て、居られる。而してその譯者は種々誤り傳へられて居ること、從つて現存の五存は次の如くであるとして居る。

① 大阿彌陀經二卷

支謙に非ずして支婁迦讖譯

② 無量清淨平等覺經

支婁迦讖に非ずして竺法護譯

③ 無量壽經二卷

康僧鎧に非ずして覺賢法賢共譯

④ 無量壽如來會

菩提流志譯

⑤ 大無量壽莊嚴經

法賢譯

これに就いて色々論すべきことあれど他日を期してこゝに略す。

② 觀無量壽經は

① 觀無量壽經一卷

後漢 失 譯

② 觀無量壽經一卷

劉宋 曇良耶舍 存

③ 觀無量壽經一卷

同 曇摩密多 缺

阿彌陀經は

① 佛說阿彌陀經一卷

姚秦 鳩摩羅什 存

② 佛說小無量壽經一卷

劉宋 求那跋陀羅 缺

③ 稱讚淨土佛攝授經一卷

唐 玄 奘 存

③ 天台、嘉祥、淨影共に『無量壽經』『觀無量壽經』の疏を作り、其他淨土教に關する著述を出す。

④ 佐々木功成氏の「白蓮社の復興運動」(龍谷大學論叢二六一、二六二號)參照、社數二十九を舉げて居るが尙多くの結社を數へ得る。

⑤ 善導の廬山訪問に就いては疑問の存するところとなし、岩井大慧氏は「善導傳の一考察」(史學雜誌四一編一、二、四、五、八)に

支那淨土教の時代區分とその地理的考察

於いてこれを否定して居られるが、支那日本の後世の佛教家は何れも瑞應傳に基いて、廬山訪問せることを述べて居る。

- ⑥ この書は普通鎮西の西譽の著とされて居るが、偽作眞作の議論の存する所である。これには以上の如く慈愍系を述べて居るが、この著者は歴史的事實に於いては全く無頓着にして、噴飯すべきものである。系流の一人づつに就いてその傳記を述べて居る所によれば、迦才は悟眞寺の元曉の嗣法となり、慈愍は天竺の人にして弘法寺に於いて、迦才の弟子となり、暗晋(即ち五代の後晋を云ふ)の高祖より紫服を賜り、惠日寺を建て、住し、光明寺、悟眞寺、東林寺、玄忠寺、千福寺、弘法寺等を兼住すると云ひ、次の智圓、慈雲、了照は次第に嗣法となると述べて居る。而してこの慈愍に二人ありとし、唐朝の慈愍は震旦人にして、今云ふ淨土宗の慈愍に非ず、淨土の宗祖たる慈愍は暗晋の慈愍にして天竺人なりと述べて居る。慈愍を二人とし、而も五代の人にして天竺人となし、それを年代も考へずに唐の善導時代即ち約二百七八十年前の迦才に面接して嗣法となつたと云ふが如き、淨土系の有名なる寺總てを持つて來てこれに兼住せりと云ふが如き、他の多くは論ぜず只この一事に於いて、この書が史的事實には何ら一顧の價值もないことが證明され得る。

- ⑦ 尙この表に就いて斷つて置き度いことは、往生人の地的分類法は、主としてその人の活動地によつて分類した。それは淨土教勢力の分布を見る上に於いて妥當であるがためである。即ち出世地よりも、その人が淨土教を學び、念佛の教を弘めたる地方を取つた。然し乍ら轉々としてその住居一定せず、又は不明なるものは、その出世地を取つた。従つてそこには全部一定の統一的なものにならなかつたことは甚だ残念に思ふ。勿論これは僧尼の場合であつて、在俗の人はこの限りではない。尙又その地名の現代地名に比定するに於いても、種々の地名辭典によつて嚴密を期したつもりであるけれども、尙多少の疑はしきもの、誤りあるものゝ存することかと思はれる。又如何なる書によるも地名を知る能はず、その人の如何なる地名も記してない場合、他の色々の本によりこれを檢出し得たが、尙これを知るを得ない人々がある。これは遺憾乍ら不明とせざるを得なかつた。

⑧ 『佛祖統記』卷五十三。

⑨ 『魏書』卷百十四釋老志參照。

⑩ 圓仁の『入唐求法巡禮行記』卷三、開成五年六月六日の條に、朝廷より毎年五台山の十二大寺に贈る布施を述べて

細帔五百領、綿五百屯、袈裟布一千端、青色染^レ之、香一千兩、茶一千斤、手巾一千條。

と云つて居る。尙又不空と五台山との關係のことは不空の『表制集』によつて知ることが出来る。五台山諸寺の華麗なること又言語に絶す、この事に就いては塚本善隆氏の『唐中期の淨土教』第二章を参照されし。

⑪ 常盤、關野兩博士共著『支那佛教史蹟詳解』卷三に載せられたる碑文參照。

⑫ 高雄義堅氏は『漢家類聚往生傳に就て』(龍谷學報三一〇號)なる論文を發表せられ、この金澤新出の傳記を研究されたもので、新なる僧侶の往生傳として價值あることを世に紹介された。後にこれが全文を付點して出されたることは、俄かに手にすることの出来ないかゝる貴重なる書をかくの如く印刷にして出されたことは吾々研究者に取つて大いに慶ばしきことである。こゝに謝意を表して置く次第である。

⑬ 大村西涯氏著『支那美術史彫塑編』の石佛碑文等による。